

横山英先生追悼号巻頭の言*1

曾田 三郎

私が広島大学文学部に入学したのは1967年であるから、今から39年前のことである。その頃と比べると、今では大学の教育・研究環境や学生の気質もたいへん変わってしまった。大学の使命が高度な知的能力を有する人材の養成にあるとするならば、評価されるべきは、そのプロセスではなく結果であろう。

広島大学に入学すると、まず当時の教養部で今堀誠二先生の講義を聞くことになったが、ここで近代化の比較史的発想や共同体・ギルドに関する知識を身につけることができた。2年間の教養課程を終えて3年生に進学し、横山英先生に教わることになったが、これ以降、大学院の時期も含めて東洋史学研究の正統な訓練を受けた記憶はほとんどない。もちろん学部 of 時期は大学紛争の影響もあったが、横山先生の授業で今でも思い起こすことができるのは、明治維新史研究、マルクスの中国論、米国の中国近代史研究であり、日本における東洋史学の史学史的な話を聞くことも、漢文史料に直面することもほとんどなかった。

こうした経験のなかで、私にとって最も学問的財産となったのは明治維新史研究であった。戦前からの明治維新史研究者のなかで、横山先生のお気に入りには服部之総であったように思う。その理由をとくに確かめたことはないが、戦後の歴史学にとって社会科学との距離のとり方は重要な問題であった。歴史学という学問の固有性を自覚的に鍛錬することなく、社会科学への接近によって光明を見出したり、「科学性」を主張する傾向はなかったろうか。そうしたなかで、考察の対象とする時代の日本社会の息吹や人々の営みに接近しようとする、そのような服部の姿勢に横山先生は魅力を感じていたのかもしれない。

東洋史学という学問については、あまり教わった記憶がないし、私にも教わろうという気持ちもなかった。卒業論文の作成が目の前に迫ってくるまでは、日本近世・近代史の著作を読みふけるという、東洋史学にとって「ムダ」な時間を過ごしてきた。大学院に入ってから似たり寄ったりで、相変わらず我流学問であったが、学問にとって、「ムダ」な時間は大切であると思う。私のこれまでの研究に多少なりとも意味があるとすれば、それはこの「ムダ」な時間における研鑽による。明治維新史研究の魅力を知りえたこと、正統な東洋史学を教え込もうとしなかったこと、この2点において私は横山先生に感謝している。今から見ると考えられないような教員と学生との関係であるが、制度化されたプロセスに従って目標にひた走りを求められる学生の将来は、はたして実り豊かなものであろうか。

ここに論文を寄せてくれた人たちとの共同研究は、私が総合科学部という新設の学部の助手になったときにさかのぼる。それから今日まで、さすがに酒量はめっきり減ったが、中国近代史研究会や酒席で切磋琢磨しあう研究者仲間である。最後になったが、横山英先生追悼のために、『近きに在りて』のこの号を提供していただいた野澤豊先生に、心から感謝申し上げたい。

*1 本文は『近きに在りて』49号（横山英先生追悼号）、2006年のために執筆された。